

63 医師 村上英俊が編纂した本邦初の仏和辞書「佛語明要」

小林 晶

九州大学医学歴史館

2015年(平成27年)4月4日九州大学医学歴史館がキャンパス内に開館した。それに先立つ学内史料整理の際、九大病院薬剤部に保存されていた「佛語明要」(1864年、元治元年出版)を発見した。4巻よりなる保存状態がきわめて良好な完本である。これには「縣立福岡病院」(明治21年~36年)および「福岡醫科大学附属醫院薬局」(明治36年~44年)の蔵書印が押印されている。本書の購入時期および現在に至った履歴を次のように考察した。

第4代福岡市長を務めた松下直美(1848-1927)は福岡藩留学生として1858年(安政5年)長崎で英仏語を学び、1867年(慶応3年)アメリカ、スイスにも留学して、帰国後語学研修の必要性を藩主黒田長知に訴えた。そして藩校修猷館では英語用のほかに仏語修学のため「佛文典」15冊、「佛語明要」5冊を長崎で購入している。このように「佛語明要」は教科書として使用されたことが記録されている(大熊、筑紫史談)。

一方、筑前福岡藩の医学校であった「養生館」は維新のため一旦廃校になったが、1871年(明治4年)「修猷館診療所」がこれを引き継ぎ、さらに1874年(明治7年)地方財政による医学校に移行して西川黙藏(1848-1926)を医師として迎えた。西川は大村藩から長崎に留学、マンズフェルト、ゲールツに師事し、明治4年以降は長崎病院医師および薬局長として医学と薬事両面に従事していた。明治7年には福岡県に招聘され「醫院三等教師兼院長」となっている。この医学校は薬舗学校を併設し「縣立福岡醫學校」、「縣立福岡病院」と移行する。これらの経過から考えると、今回発見した「佛語明要」は藩校修猷館からのものである確率が高いと推量できる。

「佛語明要」や著者である医師村上英俊(1811-90)については、これまで仏文・仏語関係者の発表があり、本邦初の本格的な仏和辞書で当時の評価はきわめて高く多方面で利用された。和綴じ368丁、35,127語を有する当時としては画期的な出版であった。村上英俊の仏語との絆は信州松代第8代藩主真田幸貫の嫡子に妹が嫁いだことと佐久間象山の存在による。1841年(天保12年)英俊は松代に移住開業したが、すでに学んでいた蘭学を通じて象山の知己をえてベルセリウス著「化学提要」(Traité de Chimie)の翻訳を依頼されたのが仏語との最初の接触であった。スエーデンから到着した原本は、蘭語と考えていた英俊にとって仏語の記述に当惑したが、果敢に挑む決心が後に本邦初の仏和辞書の編纂に取り組む機縁になった。松代藩には蘭仏辞書があったが、恐らくフランソワ・ハルマによるものではなかったか、と推察されている(富田、宮永)。これを片手に筆で一語一語確認しながら、約5カ月で初等文法を会得した。ようやく16ヶ月を経て「化学提要」の翻訳を完成した。開業生活のかたわら英俊の奮闘は目覚ましいものであった。

しかし、学者としての生き方を求めた英俊は、勉学を志し1851年(嘉永4年)江戸に移住した。折角の仏語の知識を生かすには辞書の編纂こそ先ず行すべきものと考えた。先ず仏語、英語、蘭語の「三語便覧」を1854年(嘉永7年)に出版している。当時の仏語の勢力は英語以上に世界的に流布して、その文化的地位は冠たるものであった。そのことは「佛語明要」の自序と凡例でも力説している。折から幕府は日仏修好通商条約の締結(1858年、安政5年)に当たって仏文作成を英俊の才能に目を留め依頼した。このことが蕃書調所教授手伝への採用に繋がり、門下生とともに「佛語明要」の編纂に着手し出版した。現在から見ると発音、和訳や文法上の問題はあがあるが、医師の編纂によるものだけに医学用語もかなり含まれて独特のものとなっている。なお本書には1870年(明治3年)「明要附録」が追加されている。英俊は医師としてこのように日仏両国の交流に尽くしたパイオニアと讃えることができる。